2025 年度後期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	総合科学部・総合科学科・１年

（１）START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

当初は東南アジアの教育に対する姿勢や、文化・宗教との関連性に実際に触れながら学びたいと思い参加した。なぜなら、以前中国のプログラムにも参加し、その際は日本教育について学ぶ良いきっかけとなったからである。その経験を経てさらに海外の教育について関心を持ったため、たくさんの本を読んだのだが、実際に行ってみないとわからないことがあると感じたからである。特に、インドネシアは島ごとに状況が変わっていることに加え、取り上げられやすいのはバリ島だったため、ジャワ島に行けることを楽しみにしていた。

そんな中、インドネシアではムスリムの子供たちが通っている私立の附属学校を訪問し、タイでは EEF という教育機関で行われている政策についてお話を聞いた。もちろん、現地の学生スタッフと自由時間にお互いの受けてきた教育や政治について話し合った。インドネシアにおいて大きく驚いたことは、民族によって教育レベルの差が大きく異なっていることと、日本と比べてアルバイトをしている学生が少ないということだった。これは発展途上国特有の事象でもあるが、その分国や一つの機関が教育に対して前向きであることが実感させられた。また、タイでは教育機関に一定のお金や人材などの資源が投資されているが、それらがないと中退や生活が困難な状況と隣り合わせであるということと、学業を重視し「お金を賄うのは親の務め」という考え方から来る圧倒的な学生アルバイト率の低さに驚いた。どちらの国でも、日本の教育・社会水準の高さに気づかされた２週間となった。

そこで私が決意したことは、以前から視野に入れてはいたものの、特に教育において発展途上の国の教育機関で働くということだ。私は今、教育学部の初等教育学プログラムに所属していることに加え、一番身近な現状をまずは知るべきだと考えているため大学卒業後は日本で先生になるが、その後世界（特に東南アジア）で働くことを決めた。日本を変えることも大事であると考えるが、それ以上に支援が必要な教育環境があるのだということに気づかされたことは、大きな経験となった。

（２）プログラム内容についての全体的な感想

講義は説明だけでなくグループで議論する時間もあり、刺激的だった。自分一人では理解できなかった時も多かったが、知っている知識を関連させて理解を深めることができた。

２週間の生活は特に不自由なく過ごすことができた。食事は辛さやパクチーに苦戦したが、多くはおいしく食べることができた。飲料水や食事は提供されることが多かっ

たため困ることは少なかった。体調を崩したときも学生スタッフの方がサポートしてくださった。インドネシア教育大学とカセサート大学の方々の支えによって 2 週間のプログラムを安心安全に楽しく過ごすことができたと思う。スタッフの方々のサポートや温かい対応がとても心強かった。
（3）今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス
留学は事前準備が大切と聞いていたが、まさにその通りだと痛感した。荷物類もそうだが、英語力やその国の言語・歴史、現地で学ぶことの事前知識はあった方がよい。それらがあることで現地での学びがより深くなると思う。私ももっと英語力を高めたり事前に勉強したりしていくつもりだったが、試験が終わってから渡航まで荷物の準備で手いっぱいだった。留学が決まった時からこつこつ勉強することをお勧めする。 健康面で不安があるなら、予防接種を受けておくべきだと思う。私は時間がなくて受けなかったが、タイトなスケジュールや疲労でいつもより健康に気を配れなくなったり、動物に近づく機会が多かったりと予想外のこともあり、受けておけばよかったと少し後悔した。 荷物に関しては、他の人は飲料水や割りばしなども持ってきており、私も持って行っておけばと思ったが、水は毎回配られたのでしおりに持参するように書かれているものを持っていけば個人的には十分だった。下着やくつ下の手洗いは大変だったので、多めに持って行ったり消臭スプレー（ファブリーズなど）を持っていったりした方がよいと思った。しかし、パスポートとお金とスマホ、そして健康な体があれば何とかなると思う。 プログラム初日、私は思った以上に英語が話せなかったことに挫折して落ち込み、この先 2 週間やっていけるのか不安になった。しかし、せっかく勇気を出して START に申し込んで海外に来ることができたのだから、この機会は二度とないと思い、もっと全力で学ばなければと感じて前向きになれました。一度やると決めて飛び込んだら、あとは全力で取り組まないといけないことに気づいた。 私は寝る前に、その日の出来事や学んだこと、感情の整理を日記に残していた。言葉に残すことでより理解が進むし、帰国してから見返すことで考え方の変化を感じることもできるので、留学中の日記はお勧めである。また、動画作成のために写真や動画をたくさん撮っておいた方がよく、その際は横画面で撮影しておくことをお勧めする。

所属学部・学科・学年	教育学部・第 1 類・ 1 年
（1）START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか	

（2）プログラム内容についての全体的な感想

START プログラム、キャンパスアジア共に二回目の参加であったが、各大学でカラーが出ていて面白かった。インドネシア・タイに共通していたのは、講義よりも訪問が主であったこと、先生を含め学生スタッフたちも私たちを大いに受け入れてくれるような姿勢で常にサポートをしてくださっていたことだ。何を聞いても丁寧に真摯に答えてくれたことは安心してプログラムを終えることに不可欠であったため、本当にありがたかった。

施設に行った際も、私たちの生活では身近でない宗教や民族との関わりについてたくさん質問し、逆に自分たちが答えるような機会がたくさんあり、自分たちの生活を見直すきっかけにもなったのがとても良かった。しかし、何人かの日本人学生に質問の内容がかなりシビアな社会的な問題に触れるようなものがあったように見受けられ、より現地の現状について学んでから行くことの必要性を感じた。その場では日本語での会話もあったため、英語で聞く前に止めることができたが、聞くとしても聞き方を工夫したり、まずは自分で考えてから聞いたりするなどの考慮が必要であると考えた。知識の量に差があることは大前提としてあると思うが、特に発展途上国や中進国に行く際は気になる内容についてももう少しシビアになって捉えることも大切だと感じた。しかし、このようなことを考えることも日本ではとても少ないので、この二週間で新鮮な考ができてよかったと思う。自分たちの「当たり前」の価値観を再認識させられた。

（3）今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

現地の言葉を少しでも覚えて行くと、会話が弾みやすかったり、最初に仲良くなるきっかけになったりする。自己紹介や挨拶、おいしい、かわいい、おもしろい、など、日本語でもよく使う言葉は他国に行ってもよく使うと考えるのがわかりやすい。また、ちょっとしたことでも「これは○○語で何て言うの？」と質問してそれを少しずつ覚えることで自分の成長にもつながり、より感情を共有しやすくなるので有効だった。現地に行く上で一番大切なことは、このような言語を含め、相手を知ろうとすることであると考えている。事前学習以外でも調べたり、聞いてみたいことをリスト化しておいたり、自分で知ったことから新たに気づく準備物をしたりと、行く前からその姿勢を持っておくことが大切である。特にアジアでは日本と似た文化もあるため、何をしてもらったら嬉しいかを考えるとより速く距離を詰めることができる。

また、行ってからは「日本では絶対にやらないこと」に注目して、それらをとにかくたくさんやってみるとより面白くなる。